一二、樺太攻略（極秘）

樺太攻略計畫に就き（部外秘）

海軍

（木田納）



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

## 樺太攻略

（末田）

陸部大將

今度は樺太攻略の計畫と云ふことに就きまして、中央に於ける陸軍側との折衝と云ふことが私に課せられて居りますが、具體的の計畫やなんかの實際やつたことは戰史に可成り詳しく出て居りますから、そんなことはお聞きになりたいと云ふ譯ぢやなからうし、又お話するのは餘敵ぢやと思ひますから、それ等のことは總て略しまして、簡單に唯々陸軍側との關係をお話したいと思ひます。

三十年の六月十日に、外務省から彼のアメリカのルーズベルト大統領から「日露の間の媒和をやつてはどうか」と云ふ通信があつたと云ふと





国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

とが世の中に發表されたのであります。さうするとそれを前後して、今度は見えませぬが、昨日氣焔も聞きました上泉君が始終參謀本部へ行つて居つたのでありますが、あの人が舞つて來て「陸軍では獨りに樺太攻略のことなどを俄かに騒ぎ出した」斯う云ふことを云うて居る。それと前後してこのルーズベルトの講和勸告のことがあつたと云ふ譯で、「成程さうか」と云うて、初めてさう云ふ問題が起つたのであります。即ちそれは樺太攻略と云ふことは陸軍が一番最初の言ひ出したのである。斯う云ふ譯であります。それから十六日になつて果して、「參謀本部に來て呉れ」と云ふことで、軍令部長、次長にお供をして私が行きました。陸軍の方もその時は總長と次長だけお出でになりまして都合五人丈の居

海軍 8

(末田)



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る所でお話がありまして、陸軍は北韓の進出と樺太攻略と云ふことの計畫を立てた、その經緯をお話になりまして、海軍の同意を求められたのでありましたが、海軍の見る所では樺太の方は宜からう、樺太の方は同意であるから早速計畫して、準備工作に掛らうと云ふことでこの方は決まりました。併し北韓の方はウラジオを攻略すると云ふならば意義があるけれども、唯々北韓に陸軍を持つて行くと云ふことは、海軍としては多大の危險を感ずるなくてはならぬ、まだ今日の場合、ロシヤの艦隊は殆ど全滅したけれども尚浦塩には殘艦無り油斷ならず又第三國の艦隊に對するやうなことをも考へなくてはならぬ、どうしても今日の場合、同意は出來ないと云ふことを海軍は決答されたものでありますから、この目

（本田）





国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は「それぢや兎に角樺太攻略と云ふことだけ」と云ふことになつて、これから着々準備に掛つたのであります。

一寸お断りして置きますが、私が部長、次長にお供をして行きました のは、山下大佐が丁度佐世保へ出張して居りまして、山下大佐が居れば これは古参で偉いて行く譯ですけれども、留守でしたから私が行つた譯 です。それから着々準備を進めらまして、六月二十六日には北進艦隊は モ十青森灣に集中せられて居り私は旗艦八雲に片岡司令長官を訪ひ來る べき樺太攻略作戰に關し中央よりの傳言を致しました。それで翌二十八 日には八雲に陸海軍の間の打合はせ會議があつた譯です。その時陸軍よ り出會したものが第十三師團長原口中將を始め兩旅團長及び兵站監等の







国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

人々でありましたが、私も丁度前からの関係もあつたものですから、行つてこれに出席致しました。そうしてその後実現しました所のあの樺太攻略の軍が愈々出征の途に上つたのであります。その詳しいことは職史に出て居りますから申しませぬ。

それから昨日上泉中將が北韓の出兵のことに就いて大分話して居られましたが、このことも少し詳しいことが此處にありますから、これを申して、その時の事情を明かにして置きたいと思ひます。七月の六日でありますが、此處に記事をその儘読んだ方がいいと思ひます。何故かならば私はその時のことは記憶にありませなかつたから昨日上泉中將のお話のとき何も申しませぬでしたが、日記を調べて見ると此處に書き附

海軍 5

（宋田徳）



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

けてありますから、それを寧ろ讀んだ方がいいと考へますから讀んで見ます

七月六日の記事

昨日山縣總長より海軍大臣へ又本日長岡次長より伊集院次長へ北韓進軍羅南清津鎮城のことと相談ありしも共に同意せられもりし趣なり

清津迄攻略する大目的立ち得るに非れは冒すべき危險を價ふの利益なしと云ふにあり

斯う云ふ記事があります。それで明かであると思ひますから、これを朗讀しただけに止めて、私はこの場合はお話を打切ります。

海軍 6

(末田)



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

山路中將

これは別に大した計畫と云ふものはないのですが、その時にウラジオには未だ「ロシヤ」「グロモボイ」「ボカツイリ」の三隻それに水雷艇が數隻居る。との三隻がどう云ふ狀態にあるかと云ふことは、はつきりして居ませぬが、まだ出動が出來るものと見てゐなければならぬ。黑龍江の下流にも砲艦若干、水雷艇七、八隻と云ふものが居る。それから樺太の陸軍が、南北に相當の數が居ります。是等を顧慮して計畫を立てたのであります。乍併當時一番怖いのはとの時分の勝だつた。寧ろ敵よりも勝に對する十分の準備をして置かなければならぬ。それからもう一つはなかなか青森から樺太迄行くのは距離が遠いので、ウラヂオを直接對艦

海軍

（木田紀）



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

をすると云ふやうなことは到底出來ない。それですから、との二回に多數の運送船を護衛して行くのには、直接に護衛をしなければならぬ。第一回則ち樺太の南部を攻略する時には陸軍の運送船は十一隻、軍艦驅逐艦廿一隻第二回則ち北の方を取る時には陸軍の運送船は二十二隻之に軍艦驅逐艦十九隻が附いて行つたのですから、隨分澤山の船になりましたのですが、兎も角直接に護衛して行かなければならぬ。第五戰隊の四隻、八島、吾妻、春日、日進の四隻は萬一ウラジオ艦隊が出たならばそれに對抗する爲めに獨自の行動を取つたのであります。大體計畫は今申しました通りに縛と云ふことに對して力を注ぎ、縛に對しては有ゆる方法を講じ、又運送船あたりには一々とちらから士官を乘せ、個小隊兵を乘せて、

（本田納）





国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十分に聯絡をとることにして置きました。もう一つ注意しましたのは、機械水雷を上陸場近邊に入れて居るかも知れない、これに對して注意しなければならぬ。それで驅逐隊、艇隊は播海に對する所の準備をするやうに計畫を立てました。それで實驗樺太方面の作戰は第四艦隊の出羽さんが實際戰場の指揮に當られて、第三艦隊の長官の方は計畫を立て全般を統轄されたのでありました。計畫はそんなことで大したことはございませんが、先づお蔭で一兵も損せず、又一艦を損せずして樺太を取ることが出來ました。この位にして置きます。

財部大將

お蔭で早く濟みましたが、少し半ばでお止めを願つた方もあるが、時

（木田納）





国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

間が餘りましたから、何かお話を願ふことがあれば、承はつた方が宜からうと思ひますが、、、、、、、、

中野中將

山路中將に伺ひたいのでございますが「八雲」は隨分氷をたたいて歩いたと云ふことですが、、、、、、、、

山路中將

樺太攻略の時分に氷があつたかと云ふことか。イヤその時分は餘程氷は少ないと思ふ。八雲は三十八年春浦鹽密輸入船拿捕の爲めに、千島列島に進出行動し其際非常なる氷の中に入つて殆んど進退谷まる如き狀況であつた、之が爲め「スクリユー」を損傷し又「リベツト」も脱むに至つ







国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

たのである。我々が行く時にはもうなかつたやうに思ふ。イヤ断じてない。

最後に一の挿話を入れたい。それは野砲數門を有する敵の敗兵約四百が「グナイチヤ」湖の南東に當る山谷に據守して我陸軍は之を攻撃するに困つて居つた、仍て村上吾妻艦長に訓令し、竹内旅團長と協議し陸兵野砲及舟船若干を吾妻に搭載し陸兵を「グナイチヤ」湖の北岸に上陸せしめ、尚又汽艇を入湖せしむることを得ば、装砲汽艇を以て適宜陸軍の援助を與ふべし、と云うのであつた。然るに同湖口は水深一尺餘にして吾妻の汽艇を入湖せしむるに困難であつた、然るに汽艇の兩側に施水せる端舟を繋縛したる後端舟の水を酌み出して汽艇を容易に入湖せしむる







国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ことを得て、大に陸軍援助の目的を達した。此汽艇の吃水を浅くすることは、聞けば難のないことではあるが私には面白く感せられた。後日私が鶴公要港部司令官當時損傷せる秋津州を船渠に入るるに此事を思出して有らゆる重量物を陸揚したる後、四隻の大ライヘを舷側に固縛し大に吃水を減少して無事に入渠せしむることを得た。経験は大切なるものだ







国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp